

【論文】

ドストエフスキイにおける心と知性の問題－『罪と罰』について

秦野 一宏

1.

人間の本性は善なのか、それとも悪なのか。

1876年2月の『作家の日記』でドストエフスキイはこう述べている。「もし我々が善人であると決またとすれば、この先どんなことがあっても、結局のところ、ことはうまくいくだろう。これがわたしの信念である¹」。ではもしも、人間の本性を悪であると考えれば「我々は」どうなると、ドストエフスキイは考えていたのか。性悪説を唱えた荀子は、人間の本性は悪だからこそ礼によって整え、社会秩序を維持すべきことを説いた。しかし『罪と罰』の主人公は、礼のような道德観念を信じず、別の考え方をする。

人間は本来、善人なのか、それとも卑劣漢なのか、—これがラスコーリニコフの問いかけである。ラスコーリニコフは言う。「もしほんとうに、人間が、総じて人間が、人間という種のすべてが卑劣漢ではなかったとしたら、ほかのことはすべて偏見で、あるのは見せかけだけの恐怖だけということになり、いかなる障害物もないということになる²」。ドストエフスキイとは違って、人間を信じられないラスコーリニコフは、人間の大半は卑劣漢であると考えざるをえない。そして人間が卑劣漢であれば、このまま放ってはおけない、この先人類はどうなるかわかったものではない。だからこの、先の知れない人類を救うために、どうしても「障害」を取り除く必要が出て来る。こうして彼は、少数の非凡人に「いっさいの障害を除去する³」権利を持たせて、力で人類を改造するという理論を考えついたのである。

しかし、いったいラスコーリニコフの考える「卑劣漢」とはどのような

者なのか。たとえば、ラスコーリニコフが人間を卑劣漢だと考える人間たちの中には、アルコール依存症のマルメラードフとその妻カテリーナがいる。彼らは娘のソーニャが娼婦として稼いだ金で生活している。マルメラードフは働かないどころか、ソーニャに金をせびって酒を飲む。辛いことだと言うけれども、もうそれがなれっこになっている（「ちょっぴり泣いて、なれっこになっているのだ⁴」）。結局のところ、ラスコーリニコフの目からすれば、彼らはソーニャに頭を垂れながら、同時にうまく利用しているのであって、まさに卑劣漢としか言いようがない。これがラスコーリニコフの考え方であるが、この例には異なる解釈も可能である。マルメラードフもカテリーナも、間違いなく、家族に対して並外れた、特別な愛情を抱いている。いったい、このような他の人間に深い愛情をもちうる人間に、卑劣漢というレッテルを安易に貼り付けてよいものか。卑劣というなら、理論のために生身の人間を殺害することは、ラスコーリニコフが卑劣と考えるどんな行為よりも、もっと卑劣であると考えられはしないか。が、そんな解釈は彼には受け入れられなかった。

ラスコーリニコフにとっては、他人の生き血を吸って生きているような老婆であれば、殺害しても卑劣漢にはならない。老婆殺害には崇高な目的があるからという、それだけのことではない。人を殺すことはたしかに残虐な行為であるが、卑劣な者たちを除去する使命を負った非凡人はまずもって、みずからが苦しんでいる。その目的がいかに崇高であれ、目的達成のために冷然として老人や子どもたちののどをかき切り、その後もまったく苦しむことのないオルロフ（『死の家の記録』）のような人間は、いくら意志が強くても、彼の理想的な非凡人ではない。彼のめざす心やさしい「真の」非凡人は、流した血に対して、大いに苦しむ。「〔流血を許す〕真に偉大な人間は、この世で偉大な悲しみを味わわなければならないという気がする⁵」と、老婆（およびリザヴェータ）殺害後のラスコーリニコフは語るが、自分自身に言い聞かせるような、その言葉の独白的な調子に注目したい（「彼は突然、もの思いにふけて」語った⁶）。彼は、苦悩する「真に偉大な人間」という自分の＜美しい＞理想像に魅入られ、殺人を高潔な行為にしているのである。

ラスコーリニコフが自身を卑劣漢だと認めるのは、なによりも、犯罪を「持ちこたえる」ことができなかったためである（「……第一歩さえ持ちこたえられなかった。それはぼくが卑劣漢だったからだ！⁷⁾」。さらには、「持ちこたえられなかった」にもかかわらず、死を選ばずに、自首して生き延びようとしたこと、同情を求めてソーニャや母親のもとに赴いたこともまた、彼には卑劣あるいは「下劣なこと」であると感じられた。

『罪と罰』を評して、E.H.カーはこんなふうに述べている。「彼〔ドストエフスキイ〕は、自我に対する知的信仰が、むしろ救いでもある人間の弱さとむなしく戦って、敗退するさまを示したのである⁸⁾」。カーの言う「人間の弱さ」とは、ラスコーリニコフが自分の犯罪を「持ちこたえる」ことができなかったことを指す。となると、ここでは、卑劣漢は、理性の声に従えない、意志の弱い人間と同じ意味になる。しかし問題は、＜強い-弱い＞だけにとどまらないのだ。「卑劣漢」が「下劣な низкий (低い) 人間」と並列され、同義で用いられていることからわかるように、＜高い-低い＞が、彼にとってはるかに大きな意味を持つ

弱さの反対は強さであるのに対し、卑劣さの反対に立つ語は、＜高さ＞を示す「高潔さ」、「誠実さ」、「勇敢」、「正義」、「善良さ」などになるだろう。不誠実で汚らしい、冷然とした卑劣漢は人類の救済を阻む障害である。そして繰り返すが、ラスコーリニコフは人間の大半が卑劣漢だと考えていた。つまり、ラスコーリニコフは自身を卑劣漢と呼ぶことで、自分もまた、高潔さや誠実さ、勇敢、正義、善良さと縁のない大勢の＜低い＞「凡人」の一人だったと認めているのだ。これはたいへんな事態である。

人間をプラスとマイナス、価値ある者と無価値な者に分ける二分法は、マルメラードフのものでもある。彼もまた、賢者・知者と「豚ども」（「酔っ払い、弱虫、恥知らず」）、正義漢と「卑劣漢」を分ける一線にこだわり続ける。ただマルメラードフの二分法は、最終的には、神の裁きという新たな尺度が持ち込まれることによって消失するのだ。マルメラードフによれば、神様は最後の審判において、「豚ども」を受け入れ、こう宣う。「私が彼ら〔豚ども〕を受け入れるのはな、(…) この者たちの誰一人として、みずからそれに値すると思った者がいないからじゃ⁹⁾」。マルメラードフの二

分法では、慎み深さという価値が新たに発見されることで、救いはどちらの側にも訪れ、誰も見捨てられることはない。一方、ラスコーリニコフの二分法は、残酷な二分法であり、どこまで行ってもマイナスはプラスに変換されない。プラスの側にいると思っているうちはいいが、今や、ラスコーリニコフはマイナスの側、障害として除去される側にいるとわかってしまった。しかし、それでも彼は自身の二分法を信じつづけるのだ。彼は、生きている意味さえ見失いかねない袋小路に迷い込んでしまっている。

いったいなぜ、ラスコーリニコフはこんな不測の事態に陥ってしまったのか。

ラスコーリニコフは、人類から障害を取り除こうとして、非凡人についての理論を拵えた。ここまではいい。ただ、自身も非凡人、偉大な人類の救済者の一人として名を連ねたいと思えば、非凡人たる証明が必要となる。少なくとも、自身が非凡人であると信じることができなければならないと、彼は考えた。そこで彼は、金貸しの婆さんの殺害を計画する。その者の死が他の人間に益をもたらすということから、これは未来の計画のためのシミュレーション、あるいは小さな実験になるはずであった。人類の救済のために害ある老婆を力で除去できてこそ、非凡人の資格を有する者と認められる、というわけである。

ラスコーリニコフの背後には、同じように婆さんをみなの害になる虱だと考え、社会的利益からすれば、婆さんの殺害は、「義務」だと考えている若者たちが大勢いる。その中の一人が、ラスコーリニコフが料理屋で偶然、その話を聞くことになった学生であった。奪った婆さんの金をもとにすれば、「何百、何千というりっぱな事業や計画をものにすることができる」、一つのちっぽけな犯罪は数千の善行によってつぐなえる、と学生は、自身の功利主義的な哲学を熱っぽく語った。それに対して学生の話し相手であった若い将校は、彼女が生きるに値しないことは認めても、生きるに値しない者も生きているのが「自然」というものだと反論する。すると、学生はこう答えた。

「いや、きみ、自然なんてものは修正し、方向づけてやらねばならんもので、それなしには、偏見に溺れてしまうことになるだろうよ。それなしには一人の偉大な人間も存在しえなかつただろう。『義務だ、良心だ』と人は言う。ぼくは義務や良心に反対しているわけではないんだが、問題は我々がそれらをどう理解するかだ¹⁰」

ここまでは、ラスコーリニコフの考え方とそっくりだ。しかし、この学生も、では自身の手で婆さんを殺すのかと将校から問い詰められると、自分は「正義 справедливость」のために言っただけで「もちろん殺さない」、「自分に関係したことではないから」と逃げを打つ。ラスコーリニコフからすれば、人類の救済を考えていようと、実際に手を下せない学生は、「偉大な人間」（「非凡人」）とはほど遠い、加工されるべき「材料」でしかない。

力はそれに「あえて」跪拝し、それを「あえて」握ろうとする者にのみ与えられる、とラスコーリニコフは信じた。ラスコーリニコフはソーニャに、老婆殺害の動機をあれこれと説明したあと、最後に告白する。「わたしはあえてやってみたかった、だから殺した！ それが原因のすべてだ」と。

「あえて行うこと посметь」ができるかどうか、論理の導くままに、実際に一線を踏み越えることができるかどうか、そこに、彼の人類救済計画の独創性がかかっている。神の不在を証明するために自殺が不可欠だと考え、それを実行したキリーロフや、「老化と自然死」を拒否し、「哲学的事業」として「自死」を決行した須原一秀氏と、事情は似ている¹¹。彼らは、「あえて」正しく行動するという自己イメージを保つために自殺あるいは「自死」を必要とした。自身の思想が机上の空論ではないと証明することが、彼らにはどうしても必要だった。

自首を決意したラスコーリニコフは妹のドゥーニャにこう約束している。「人殺しでも生涯、勇気のある、誠実な人間になるよう努力する。(…)見ていてくれ、おまえたちの名前は汚さないから。ぼくはまた証明してみせる……¹²」と。思いや感情だけではだめなのだ、証明できないことには、意味がない。ラスコーリニコフの知性は何であれ、強迫的に証明を要求しつづける。「非凡人」であることが証明できなければ、代わりに今度は「勇

気のある、誠実な人間」であることを「証明」せよと……。ラスコーリニコフを袋小路に追い込んだのは、この、どこまでも証明にこだわる知性であった。もちろん、あの残酷な二分法を生み出したのも、この知性なのである。

2.

ラスコーリニコフは、知性を絶対的なものだと思いつづける。しかし、彼の中には、「聡明な人間」と自称するラスコーリニコフに抵抗するものも棲んでいる。

ラスコーリニコフは自身の理論にしたがえない臆病さ、弱さを「卑劣だ」と斥けた。しかし、彼自身が無意識のうちに感じていることだが、流血を許す理論に抵抗するのは、捕まりたくない、自身の手は汚したくないという臆病な心だけではなかった。臆病（＝「力」の欠如）とは相容れない別の感情、自身の心の奥底にしまい込まれた「聖なるもの」に由来する感情もまた、大きな抵抗を示すことになるのだ。抵抗するのは、単に理論に対してだけではない。感情は、流血を許す理論を作り上げたラスコーリニコフの「知性」そのものに異を唱えるのである。おそらくこの感情も彼に言わせれば、「卑劣」あるいは「下劣」ということになるのだろう。「知性」のイエスマンであるラスコーリニコフにとって、「自己保存の感情」を含め、自身の中であって「知性」に立ち向かう感情はすべて、不誠実で、卑劣なものであったのだから。

「聖なる」感情の抵抗を具体的に見てゆこう。『白痴』や『カラマーゾフの兄弟』においてもそうだが、ドストエフスキイにあっては聖なるものは子どもと深く関わっている。

ラスコーリニコフはどうやら子ども時代をしあわせに過ごしたらしい。母親のプリヘーリヤによると、15歳の時にはすでに彼女の手にも負えず、その性格は理解しがたいものとなっていたというが、それ以前、少なくとも父親が生きていた頃は、素直で、心のやさしい子どもであった。

ラスコーリニコフには6ヶ月で死んだ弟がいた。自身はこの弟のことはまったくおぼえてもいなかったけれど、7歳の頃、自分に小さな弟がいた

という話を聞かされてからは、祖母の法事で教会に連れられてゆくたびに、彼は、祖母の墓のそばにあった弟の小さな墓に「信心深く、うやうやしい気持ちで十字を切り、お辞儀をして墓石に口づける¹³⁾」ようになったという。またプリヘーリヤの手紙からも、父親が健在であった幼い頃のラスコーリニコフが、信心深い子どもであったことが窺い知れる。彼女によれば、ラスコーリニコフはよく彼女の膝に抱かれて「まわらない舌でお祈りを捧げていた」という。現在のラスコーリニコフは20代の半ばになっているが、プリヘーリヤは息子が「最近流行の不信心」に取り付かれているのではないかと心配して、「しあわせだった」幼い日々を思い起こしてくれるようにと念じている。

大人になったラスコーリニコフには、すでに信仰心は失われているけれども、その心の中には、無心に神さまに祈っていたやさしい、無邪気な子どもが今もなお、住みついている。ラスコーリニコフは老婆の殺害を計画している時に「痩せ馬 *кляча*」が殺される夢を見るが、この夢には、7歳ぐらいの信心深かった<ラスコーリニコフ>が登場する。父といっしょに祖母の墓参りに行く途中、酒場の前を通りかかった時のことである。ちょうど祭りの日に当たっていたのか、酔っ払いたちが酒場の前に集まっていたのだが、そこで、ミコールカという若者が痩せ馬を虐待しはじめた。<ラスコーリニコフ>は、その残虐な場面を黙って見過ごせない。馬が鞭で目を打たれはじめるともう、大声でわめきながら近くにいた大人に飛びついてゆく。馬が鉄槌でめった打ちにされた時には、もう我を忘れ、人を掻き分けて馬の方に近づいていった。

「叫び声をあげながら人群れの間を通りぬけ、あし毛のそばに駆けつけると、彼はその死体となった馬の、血まみれの鼻面をつかんで、その鼻面に口づけし、その目と唇にも口づけをした……それから、突然跳ね起きると、逆上し、小さなこぶしをかためてミコールカに向かって突進していった¹⁴⁾

<ラスコーリニコフ>の「小さなこぶし」はミコールカに向けられたもの

であると同時に、大人のラスコーリニコフに向けられたものでもある。

瘦せ馬はミコールカの所有物であるわけで、自身の所有物をどう処分しようとする自由だというミコールカの言い分は、それなりに筋が通っている。しかし子どもの目には、馬が誰の所有物であるかなどという大人たちの取り決めは関係ない。酔っ払いのわるさだ、気にするなと父親に言われても、納得がいかない。なぜ「かわいそうな」馬を殴って殺すのか、その意味がわからない。同じように、老婆がいかに害を撒き散らしており、その死が益を生むのだと説明しようとも、生きている人間を斧で殴り殺すことを子どもの前で正当化することはできない。大人たちに対してであれば、ナポレオンのような「非凡人」、偉大な人間たちも流血を許してきたなどと、得意の論理を積み重ねることができるかもしれないが、この論理は子どもの<ラスコーリニコフ>には通じない。

「ほんとうにおれは斧をとって頭をなぐり、彼女の頭蓋骨をこなごなにするつもりだろうか……主よ、ほんとうにそんなことをやるのでしょうか¹⁵」。

夢から覚めたラスコーリニコフは思わず、そうつぶやく。「主よ！ господи！」という呼びかけに注意したい。ここでの господи！ は「ああ！」というような感嘆詞としての意味を超えて、まさに本来的な意味での神様への呼びかけを表している。すぐあとでも、「主よ！ わたしに道をお示してください」とラスコーリニコフは言うが、ここではもうはっきりと、「[そのように] 彼は祈った」と記されているのだ¹⁶。

しかし、この「小さなこぶし」の抵抗も神への祈りも、結局は、<知>の先導する老婆殺害計画を阻止することはできなかった。「何でも知っている」と豪語する<聡明な>ラスコーリニコフは、何も知らない頑固な子どもの聖なる声を抑えつけて、老婆殺しという凶行に走ってしまった。それだけではない。老婆殺害後、彼はたまたま部屋に入ってきたリザヴェータも「思わず」殺してしまう。

計画とは無関係の善良なリザヴェータを殺すことによってラスコーリニ

コフは、必要もないのに瘦せ馬を殺したミコールカにいつそう近づき、瘦せ馬をかわいそうだと思う子どもの抵抗は、さらに大きな意味を含みこむことになる。

ラスコーリニコフに殺される寸前のリザヴェータの「子どものような」表情、「小さな手」を前に差しのべて泣き出しそうにした「子どものような」所作は、リーザ殺害の告白を受けた時のソーニャの表情、所作とそっくりだった。義理の姉から「夜昼なく奴隷のようにこき使われ」ながら、文句も言えず、おとなしく耐えているリザヴェータは、まさに「瘦せ馬」のような存在であったが、一方でリザヴェータの信仰上の友であったソーニャもまた、カテリーナから「瘦せ馬」にたとえられている。（「みんなで瘦せ馬 *кляча* を乗り潰したんだ¹⁷」）。こうしたことはすべて偶然ではない。

「瘦せ馬」リザヴェータが殺されると、今度は「瘦せ馬」ソーニャが呼び寄せられる。夢の中の子どもの「小さなこぶし」と、リザヴェータの差しのべられた「小さな手」は、その後はソーニャという形をとって、ラスコーリニコフの前に立ちはだかることになるのだ。

ラスコーリニコフは、殺人者と娼婦は同じ一線を越えた者、孤独な者であると考え、ソーニャの「涙」を求めて彼女のもとを二度訪ねる。しかしその意図はどうあろうと、実際には、彼は彼女を苦しめ、「その人生をむしばむ」ことになった。彼はやましさを振り払い、自身を正当化するために、ソーニャの心の問題に土足で踏み込んでくる。これは精神的な「瘦せ馬殺し」の試みである。ソーニャは、＜正しい＞論理を押しつけてやまないラスコーリニコフに、「あなたは何も知らない」と激しく抗議する。

最初にソーニャが、あなたは何も知らないと抗弁するのは、第4部第4章、初めて彼がソーニャの部屋を訪れた時である。ラスコーリニコフは現実を直視せよと言わんばかりに、マルメラードフの死後、残された妻のカテリーナやソーニャ自身、そして子どもたちがたどる悲惨な運命を、わけ知り顔で描き出してみせた。その中で、彼はエカテリーナがソーニャをぶったりして、彼女に辛く当たっていたことにも言及したのだが、「ぶった」という言葉を耳にすると突然、ソーニャは顔色を変え、義母のエカテリーナを懸命に弁護しはじめた。

「今の母は悲しみのために頭もすっかりおかしく……なっていますが、以前は聡明で……なんと心の広い……なんとやさしい人だったか！ あなたは何も、何も知らないんです。(…) ぶった！ なんてことをおっしゃるの！ ああ、ぶっただなんて！ たとえぶったにしても、それがどうだというの！ どうだというんです？ あなたは何も知らないんだわ……。あれは不幸な人なんです、ああ、ほんとに不幸な人！ それに病気で……。彼女は正義を捜しているんです……。彼女は純粋なんです¹⁸」

ラスコーリニコフは「ぶつ」という現象だけを見ている。AがBをぶったのなら、Aは悪者で、Bは当然Aを憎む、というわけだ。ぶったのはAではなく他ならぬカテリーナであり、ぶたれたのはBではなく他ならぬソーニャであることに彼は頓着しない。ぶった人間とぶたれた人間の関係、双方の心の内をまったく知ろうとしない。ソーニャたちが「ひとつとなって」生きていること¹⁹、ソーニャがカテリーナに対して飽くことのない「共苦 *сострадание*」を感じていることも、彼には理解できない。「科学」は「共苦」を禁じている、とは、新思想かぶれのレベジャートニコフが借金を断る時の言い訳に使う言葉であるが、ラスコーリニコフもこの言葉をまじめに信じているのかもしれない。彼が関心をもっているのは、感情をまじえず、ひたすら相手を論理で追い詰めることだけだ。だから、肺病で死にかけているカテリーナには、早く亡くなってもらったほうがいいのではないか、などという非情な言葉も吐ける。亡くなれば食い扶持が減る、—それはラスコーリニコフにとっては、金貸し老婆の生死の問題同様、損得勘定で割り切れる、簡単な算術の問題でしかない。このことは酔いどれのマルメラードフに関してもあてはまるだろう。おまえのお父さんはおまえからなけなしの金をせびって飲んでいたので、亡くなってよかったのだと、ラスコーリニコフがもし言ったとすれば、ソーニャは間違いなく、身を震わせて、「あなたは何も知らない」と返しただろう。ラスコーリニコフは客観的な立場で、マルメラードフを卑劣漢だと断じたが、こと人間の心中に関しては、客観的な推論が正しいとは限らないのだ。

ラスコーリニコフは追い詰められたソーニャの行く末も、第一に、第二に、第三になどと、客観的、＜科学的＞に分析する。彼によれば、ソーニャには、第一に運河に身を投げる、第二に発狂して精神病院に入院する、第三に淫蕩に身をゆだね、理性を麻痺させて心を石に変えてしまう、という三つの道が残されている。最後の考えは彼にとって「もっとも忌まわしいもの」だった。しかし、語り手の言葉を用いれば、彼は「懷疑派であり、若くて抽象的で、したがって、残酷であった」ので、第三の道を信じざるを得なかった。

またラスコーリニコフは、ソーニャが精神の純潔を持ちこたえられているのは、発狂の徴候ではないのかとも推論した。彼はこの「結論（出口）」が最も気に入ったので、「ひときわ目を凝らして〔発狂の徴候がないか〕彼女を凝視し始めた。まるで顕微鏡を覗く科学者のような態度で、彼は人間を見る。

このようなラスコーリニコフの態度は、1840年代から50年代にかけて流行していた＜生理学もの＞の作者たちを思い起こさせる²⁰。＜生理学もの＞の作者たちは高みに立ち、「ちっぽけな人間」を「生きもの」扱いして、その生態を観察しているが、ドストエフスキイはこのような、人間の尊厳を踏みにじるような観察は果たして許されることなのだろうかという、ヒューマンな問いかけをもって作家になった。その作家としての姿勢は『罪と罰』においても変わらないが、事態はいっそう深刻化している。＜生理学もの＞の作者たちは、人間の外面に執着していたのに対し、科学に憑かれた＜現代の若者たち＞は、まるで器官や細胞を見るように、人間の心中を観察、研究しようとしているのである。

さて、ソーニャがラスコーリニコフに再び、あなたは何も知らないという言葉突きつけるのは、第5部第4章、ソーニャがルージンの陰謀で金を盗んだという嫌疑をかけられる事件があったあとで、場所はやはり、ソーニャの部屋である。

ラスコーリニコフはここで、ソーニャに向かって老婆とリザヴェータ殺しを告白する。リザヴェータについては偶然、殺害してしまったわけだが、なぜ老婆を殺そうとしたのか、その動機は説明しても、ソーニャには分か

らないだろうとラスコーリニコフは思っている。それは相手を知的に幼い
と見做していたからにはほかならない。しかし、内心そう思っていながらも、
彼は相手が理解できるかどうかを気にすることなく、自分はナポレオンに、
人々の支配者になりたかったのだと、本心の一部を吐露する。神を信じる
ソーニャは彼女なりの反応を示し、「あなたは神様から離れたのです。だから
神様はあなたを罰して、悪魔の手に引き渡したのです²¹」と断じた。ラ
スコーリニコフにしてみれば、このような信仰者の言葉は想定済みの、あ
りきたりのものでしかなかった。「そうそう、ソーニャ、それはぼくが暗闇
の中で寝そべっていた時、すべてが見えてきた時のことさ、あれは悪魔が
ぼくを惑わしたんだよね、そうでしょう？²²」。この言葉を聞くと、ソー
ニャは、「何も、あなたは何もわかっていない！」と返す。するとラスコー
リニコフは憤ることもなく、平然と、「ぼくはすべてを知っている」と言っ
てのけた。

「それはみんな、ぼくが暗闇で寝そべっていた時に、もうさんざん考え、
何度も自分に囁いていたことなんだ……。そんなことはみんな自分自身を
相手に議論したことなんだ、細部の細部にいたるまでね。すべてを知って
いる、すべてを！ そしておしゃべりにあきあきした、その頃からもうあ
きあきしていたんだよ、そのようなおしゃべりにね！²³」

「自分自身を相手に」徹底的に論じ合った、だから「すべてを知っている」。
このように豪語するラスコーリニコフに対して、ソーニャは何も言えない。
じつのところ、すべてを知っているという傲慢さ、うぬぼれにこそ、悪魔
のつけ込む隙があるのだが、ラスコーリニコフはそのことには思い至らな
い……。「どうして人間なしで生きていけるの！あなたはこれからどうなっ
てしまうのかしら！」という、自身を気遣ってくれる彼女の言葉に対しても、
ラスコーリニコフは、「子どもみたいなことを言うんじゃないよ」と、
「おだやかに」対応する。偉い大人と愚かな子ども、この対立図式はラス
コーリニコフにとって、自身と人々の関係を考える上での公理のようなも
のである。＜偉い＞ラスコーリニコフには、「子ども」の声が届かない。

ラスコーリニコフはさらに、性病に罹り、稼ぐことができなくなったら子どもたちはどうなるのかとソーニャをじりじりと、理詰めで、追い詰めてゆく。すると、彼女は答えに窮し、最後には子どもたちは神様が守ってくださると言わざるをえなかった。ラスコーリニコフには、破滅のふちにしながら、その危険を告げられても耳を塞いでいられるのは、ソーニャに「健全な理性」が欠如しているためだと思えない²⁴。神様は許さないなどと泣いていてもはじまらない、このままではいけないのだとラスコーリニコフは説く。

彼の描く未来のシナリオは、権力を手に入れ、「打ち壊すべきものを、一思いに打ち壊し」、「苦しみを一身に背負う」というものである。破壊の目的は、「ふるえおののくいっさいの生きものと、この蟻塚の全体を支配することにある²⁵」。「真に偉大な人間」として、卑劣漢である人間どもを力で支配し、そのことによって彼らの苦しみを取り除いてやる、—これが、ソーニャにはなく、自分にはあると信じるラスコーリニコフの「健全な理性」の示す道であった²⁶。

このような力と「理性」による打開策は、ソーニャにはまったく理解できない。なぜなら彼女は純真な<子ども>であるからだ。リザヴェータたちの血を流すことを正当化する「破壊」は、<子ども>には理解できない。一方、ラスコーリニコフはといえば、自分の言葉が理解されないことの意味を問い直すことなく、ここでも、非は相手側にあると考えた。そして、「そのうちいつか、何年か後に、人生の経験を積んだら、きみにもその言葉が何を意味していたか、分かるようになる²⁷」と、理性ある、経験豊かな大人として、何も知らない未熟な<子ども>をいたわってみせる。

ただ、加えて言うておかなければならないが、ラスコーリニコフにとって子どもは特別な存在であった。子どもは「キリストの化身」であり、「未来の人類である」とは、聖書を信じるソーニャを説き伏せるため、戦略的に使われた言葉ではあったが、これは単なる論争用の修辞ではないだろう。火事場でやけどを負ってまで、二人の幼い子どもを助けたこともある。偶然街で見かけた、男に付けねられる泥酔した少女(=子ども)のことも

心配になり、近くを通った巡査にかけあったこともある。自身の力ではどうしようもない無力な子どもたちの窮境を、彼は放っておけないのである。ただこのような子どもに対するやさしさを彼自身は、論理的に考えて、あるいは客観的に見てまったく価値のないものだと思っている。ここに問題があるのだ。

3.

ラスコーリニコフは無意識的に、直接的に行動する時、わけでも自分で行動の意味がわからない>と感じている時には善良であり、論理的、意識的に考え、<すべてわかっている>と結論を出すと、冷酷になる。そしてこの意識的な冷酷非情は、彼の壮大な人類救済計画の中に織り込み済みのものなのである。これがなければ、そもそも計画自体、発想の段階で崩れ去る。

ラスコーリニコフにおいてこの意識的なものは、すでに触れた客観的、科学的態度ともつながっている。

たとえば、無意識的に、あるいは直接的に憐れみを感じたとしても、改めて<科学的態度>で接すれば、憐れみの対象は観察の対象となる。この態度をとることによって、すでに触れた、男の毒牙にかかる寸前の泥酔した少女は突然、固有性を失い、統計上の単なるパーセンテージとして認識されることになる²⁸。今、たとえ少女を助けたとしても、統計的に見れば、誰かが同じ目に逢うのだと考えると、とたんに彼は目の前の少女がどうなろうとどうでもよくなる²⁹。もちろん、どうでもいいと思えるのは、のちに自身が偉大な人間として、たくさんの少女を救い、統計的数字を書き換えるという前提があったからだ。偉大な人間は、小さな問題で悩む必要はないというわけだ。しかし、この前提が崩れる時がくる。

ラスコーリニコフは殺人を決行した次の日に、このパーセンテージの問題にもう一度立ち返る。その日、彼は捕まらないかとびくびくしながら時を過ごした。警察から出頭の呼び出しがかかっていると知らされた時には、不安で胸がしめつけられる思いがしたが、結局それは家賃不払いによるもので、老婆殺害とは無縁のものであった。その後、盗んだ物品を始末して

いないのに気づくと、またもや恐ろしい不安に駆られ、それを部屋から持ち出して大きな石の下に隠す。やれやれこれで証拠は見つからないと一安心し、ほっと一息、笑い出す。しかし、K並木道に足を踏み入れるや、笑いは消えた。一昨日、少女が行ってしまったあと、すわってものの思いにふけていたベンチのそばを通り過ぎることが、おそろしくいやな気がした。

「彼はうつろな、敵意ある目であたりを見まわしながら歩いていた。いま彼の全思考は、ある重大な一点をめぐって回転していた。そして自身でもそれが実際、きわめて重大な一点であり、いま、まさにこの瞬間、自分はその重大な一点に直面することになったのだということを、それに、そうになったのはこの2ヵ月以来はじめてのことであるということ、感じていた。／『何もかもくそくらえだ！』と、狂乱した悪意の発作の中で、彼は突然思った。『始まったものは始まったものだ。彼女や新しい生活などくそくらえだ！ 主よ господи、なんとこれはばかげているんだ！…… 今日、どれくらい嘘をついたか、卑しいまねをしたか。(…) だが、これもくだらんことだ！ (…) まったくそういうことではない、そんなことじゃない！……』³⁰⁾

下線部の「彼女」は具体的に誰のことを言っているのか、議論の余地はあろうが、おそらくは今、彼を悩ましているのは「婆さん」ではなく、「少女」であろう³¹⁾。「新生活」と深く関わるのは、虱の価値しかないと考えている「婆さん」ではなく、「未来の人類」である子どもである。こう考えてはじめて、「2ヵ月以来はじめて」直面したという「きわめて重大な一点」が見えてくるのではないか。一昨日は、全体として被害者のパーセンテージは変わらないのであってみれば、自分の個人的な救済行為には意味がない。だから「どうでもいい」ということになったが、この引用の個所での「くそくらえ」とは捨て鉢な気分は共通しているとはいえ、その意味するところはまったく違う。

個人でなしうる善には限界がある。彼は少女ではなく＜少女たち＞を、個ではなく＜全体＞を救うために、良心の呵責を圧殺して2ヵ月前から殺

人を計画し、実行した。実行にいたるまでは、いかにして遂行するかということに考えが集中していたが、今や老婆殺し計画のそもそもの目的、＜少女たち＞を含む人間たち全体を救う真の目的に立ち返るべき時であった。でなければ、自身の計画は単なるありふれた犯罪にすぎなかったことになる。殺人を犯したのは思想の正当性、救済へ向かうことへの確信、自身への確約があったからだ。殺人のあとには「新しい生活」が始まるというのが、彼の理論の支柱であった。一つの善の代わりに、「幾百、幾千という善行」を行うべき時が今や始まらねばならない。少なくとも、自身が人類の救済という偉大な道を歩もうとしている勇敢な人間であることを信じつづけていなければ、老婆を殺した意味がない。

ところが、いざ事業を決行してみると、なんのために醜惡な行為したかを忘れはて、捕まらないかとおびえている。危機を脱したと思えた時には、「純粹に動物的な喜び」すら感じている。証拠物品の隠匿に奔走し、うまく隠しおおせたと思った時には、思わず笑いがこみ上げてくる。しかしふと我に返ってみると、そこには「自己保存の勝利感」に酔っている卑しい自分がいた。彼は激しい嫌惡感に襲われる。そしてさらに、予想していなかったことが彼の身に起きた。少女たちの救済や新生活などという未来の事業そのものを、彼は信じられなくなってしまったのだ（それが観念としての殺人と実際の殺人の違いである）。

すでに見たように、「主よ」という呼びかけは、ラスコーリニコフの心の信心深い＜子ども＞の声と重なり合うものであった。この呼びかけはここでは、思いもよらぬ惡魔的な筋書きに抵抗できない心の絶望的な叫びである。未来のために行った行為は、未来を作るところか、未来そのものを消失させてしまった。そして、残ったのは、自分がもはやこの世界から切り離されてしまったという離人症的な感覚だけである。「なによりもやりきれなかったのは、これが意識とか、観念とかいうよりも、むしろ感覚であったこと、直接的な感覚、これまでの生涯に彼が体験した感覚のうちでも、もっとも苦しい感覚であったことである³²」。過去の理想は吹き飛んでしまった。殺人があっても生は同じように連続するものだと思っていたが、そうではなかった。以前の考えも、問題も、テーマも、眺望全体も、

彼自身も「深い底」に行ってしまったような感じであった。結局、彼は自分の思想の正しさを証明することはできなかった。

知性がすべてだと思い込んでいるラスコーリニコフには、知力をふりしぼって作った全体のシナリオが間違っていたなんて認めることはできない。自身の破滅になる。知性を責めることは、自身の存在そのものが否定されているように思えるのだ。自首する直前、彼はドーニャに言い訳がましく語っている。

「ぼくはあの馬鹿げた行為〔老婆殺害〕でただ、自分を独立した立場に身を置きたかっただけなんだ。最初の一步を踏み出して、資金を獲得したかっただけなんだ。そうなれば、比べてみてもはるかに多くの利益 пользаで、すべてが帳消しになっていたはずなんだ……。しかし第一歩も持ちきれなかった。なぜなら、ぼくが卑劣漢だったからだ！ ここにすべての問題があるのさ！ だからやっぱり、きみたちの目でものを見るようにはならないよ。もしも成功していたら、栄冠を受けていたのに、いまは、罨にかかった！³³」

あたかも、実験の結果を検証しているような趣である。実験装置にも実験方法にも間違いはない。もし間違ったのなら、それは偶然の因子がまじりこんだためだと、言いわけされているようだ。事の成否を利益の多寡だけで量ろうとしているのも気にかかる。

ルージンは彼の理解する「科学」と「経済学」の真理を、彼流にこう説明した。「科学はこう言います。〔汝の隣人を愛せよではなく〕まず誰よりも先に自身を愛せよ、なんとなれば、この世のすべては個人の利害に基づけばなり。(…)ただもう自分一人のために利益を得ながら、そのことによって、万人のためにも利益を得るようになるんです³⁴」。ラスコーリニコフはそれを聞いて、最後までその考えを押しつめてゆくと、人を切り殺してもいいということになると揶揄する。ルージンは、ものごとにはすべて程度というものがあると逃げを打つが、結局、ルージンにとってまず第一にあるのは自身の利益追求であり、科学はそのカムフラージュにすぎなか

った。しかし、ラスコーリニコフはルージンとは違う。純粋な彼は人類全体の利益追求のために、科学に真正面から向き合うのだ。自身の誤算より理論の正当性に関心をもつのも、リザヴェータ殺しが問題になっていないのもすべて、この厳格なく科学的者の態度>によって説明される。「うっかり」殺してしまった者は考慮すべきでない。多数の命を問題にしている時には、一つの命など、考慮する必要はないといわんばかりだ。

しかしながら、このようなラスコーリニコフの<科学的態度>には例外がある。

ラスコーリニコフにとって金貸しの老婆は人類の未来のための踏み台、材料にすぎなかったのだ。ところが、ラスコーリニコフは、「たいせつな者たち」はいかに凡人であっても、材料にすることはできないと感じる。これは<科学者>の態度ではない。統計的に考えて見殺しにした少女の場合でも、「しかし、もし、[妹の] ドゥーネチカがなにかのパーセントに入ったら！ それではなく、別のでも？」と自問していた。このように、肉親への愛情に係わるような、無意識の感情を思考しようとする、思考そのものが乱れ、停止する³⁵。この矛盾には彼も気づいていて、だからこそ「ああ、もしもおれがひとりぼっちだとしたら、誰からも愛されることがなかったら、おれだってけっしてだれも愛しはしなかったろうに！ こんなことはみな何もなかったろうに！³⁶」という嘆きも出てくるのである。

ラスコーリニコフに言わせれば、彼自身は「聡明な人間 умник」として老婆を殺害した。『罪と罰』草稿の表現を用いれば、ラスコーリニコフは「意識的、論理的に」殺害した³⁷。彼は法律の条文に違反したことは認めても、自身の行為がなぜ、いけないことなのか、理解できない。ところが兄が殺人犯であることを知って苦しみ、悲しむ妹ドゥーニャの姿に思いがゆくと、彼は、「おまえたち[母と妹]の名前は汚さないから。ぼくはまた、証明して見せるから³⁸」とつい言ってしまふ。証明できるあてもないのに、どうして自身信じていない、こんな口からでまかせみたいなこと彼は言うのか。それは、苦しんでいる相手を思いやっただけのことである。この言葉は、ラスコーリニコフが「知性」に取りつかれていることを示すが、「知性」がそれを言わせているのではない。彼は母にも嘘をつき、そして自身が嘘をつい

たことに驚く。「ぼくは信仰などもっていない。だのに母さんには、ぼくのことをお祈りしてくれと頼んできた。いったいどうなっているんだ？ ドゥーネチカ、自分でもまったくわけがわからないよ³⁹」。

わけがわからないのは、子どもに対する愛情も同じだ。ラスコーリニコフにはポーレチカを見ることが「楽しくてならなかった」のだが、「彼自身には、なぜかわからなかった⁴⁰」。

すべて意識ではわかっていると信じるラスコーリニコフではあるが、証明できない自身の個人的感情、わけても愛情に関しては、わからぬことだらけである。個人を<愛する>ということは科学者の態度では理解しがたいのだ。ラスコーリニコフの理論は、一人ぼっちで愛のない世界に生きる者にとってのみ、矛盾のない理論であった。彼は人類愛、人間愛のような観念的な愛の上に、自身の理論を作りあげたが、もしも人への個別的愛を考慮すれば、人を差別化する理論は成立しない。

おもしろいことに、語り手もまた、ラスコーリニコフがすべてをわかっていると言っている。スヴィドリガイロフのように自らの手で自身の生を終わらせるべきだと考えていたにもかかわらず、ラスコーリニコフは生きることを決断した。そして彼は、この決断を死への本能的恐怖だと思い込み、ここでもまた自分のことを「卑劣漢」だと考えた。しかし、語り手は言う。この決断は、「自身の信念に深い嘘を予感していた」ためであるのだけれど、ラスコーリニコフ自身にはそのことが「わからなかった」のだと。あるいは、ソーニャの抵抗の言葉やそこにあふれ出る感情は、意識されぬまま、ラスコーリニコフの心の奥底にじわじわと染みこんでいったのかもしれない。

4.

ラスコーリニコフは自身の思想は正しかったと信じつづけるが、殺人を許容するこの思想を持ちきれぬ人間は、<わからない>ことで苦しめられる彼ではなく、わからないものに悩まされることなどないスヴィドリガイロフのような男であった。ただスヴィドリガイロフには、人類を救済したいなどという理想（「シラー的なもの」）はない。彼には、子どもは人類の

未来だとは信じられないし、子どもを救おうなどという気持ちも毛頭ない。

なるほどスヴィドリガイロフ自身は、自分は子どもが大好きだと言う。それはしかし、ラスコーリニコフの子ども好きとはまるで意味が違う。ラスコーリニコフは、10歳のソーニャの妹ポーレニカに、姉さんだけでなく自分のことも祈っておくれなどと、やさしく語りかけている。すでに触れたように、彼は彼女を見るのが楽しくてならなかった。一方、子どもは大好きだと言うスヴィドリガイロフは「穴場 *клоак*」めぐりをして、たとえば、薄汚い「穴場」で、酔っ払い相手に13歳ぐらいのかわいらしい女の子がカンカン踊りを強いられ、恥ずかしさで泣き出してしまうような場面に出会えることを楽しみにしている。

創作ノートの実現を使えば、彼は「コントラスト」が好きなのだ。彼が酒場でたまたま出会った二人の書記と仲よくなったのは、二人がともに鼻曲がりであったからだ。「一人は右に、もう一人は左に鼻が曲がっていて、これがスヴィドリガイロフをびっくりさせた⁴¹」。幼い年齢とその成熟度の「違い」、そのコントラストに情欲をかきたてられる。彼にあっては、身体的にも精神的にも変わった人間はみな、「興味深い観察の対象」になるのである。

ラスコーリニコフには彼なりの子どもへの愛情(さらには家族への愛情)があり、それが、人間を支配者・被支配者に二分化する彼の理論と齟齬をきたすために心中に揺れが生じるが、スヴィドリガイロフはずっと安定している。自ら「高等遊民〔白い手〕」であることに徹しているという彼に言わせれば、自身が属する教養階級には、「聖なる伝説」はない。ロジンスキイ氏はスヴィドリガイロフを評して、彼は善を感じることができるが、それは「道徳的基盤なしに、芸術的に(抽象的に)」感じるのみであると述べている⁴²。私に言わせれば、スヴィドリガイロフの態度は芸術的というよりも、中立をこととする極端な科学者の態度である。ただこの「科学者」には研究する目的がない。彼は、ラスコーリニコフのように自分を責めることも他人を責めることもない。責めるためには、聖なるもの、あるいはそれに準ずる何かの規範を信じていなければならないが、善悪の基準となるものが彼にはないのだ。スヴィドリガイロフはすべてを受け入れる。彼

の感覚では、すべては許されているのだ。

スヴィドリガイロフは殺人犯ラスコーリニコフにも関心を持ち(「あなたの置かれている信じられない状況が気に入りましたな⁴³」)、「脇から何回となく」観察している。「家から出てくる。まだ頭をまっすぐに立てたままだ。が、20歩ほど歩くと、もう頭を垂れて、両手を後ろに組んでいる。目は開けていても、どうやら前も脇も、まるで見えていない。ついには唇をもぐもぐ動かして、自分を相手に話しはじめる。時には、片手を振りまわして、演説口調になっている。とどのつまりは、道の真ん中で長いあいだ立ちどまっている⁴⁴」。彼の描き出すラスコーリニコフはまるで機械である。スヴィドリガイロフによれば、このように歩きながら独りごとを言っている連中が多く生息するペテルブルグは「半狂人の町」で、ロシアに「科学」があれば、医者でも法学者でも、哲学者でも、それぞれの専門に応じて、この上なく貴重な「研究」ができるという。

とはいえ、スヴィドリガイロフ自身はラスコーリニコフたちの内面的苦悩にはまったく関心はない。ラスコーリニコフを観察しているのは、ドーニャの心を引くために彼を利用できないかと考えているためであることは疑いないが、それも突き詰めれば、「どうでもいいこと」である。ただ、彼は流行の「解剖学」だけには特別興味を抱いているようだ(「今の私は、解剖学一つに望みをかけているようなわけですがね⁴⁵」)。彼の考えでは、解剖学は、外面的ないっさいの虚偽が剥ぎ取られたところに見えてくるものを追求する、ということになるだろうが、実のところ、解剖学はまた、人間を構造、あるいは機械として見るところに特徴があるのである。彼の場合、虚飾を剥ぎ取って見えてくるのは、「くもの巣のかかった風呂小屋」のような永遠でしかない。

すべてがどうでもいい、要は生きる力が枯渇しているだけなのだ。そのような状態はよくない(「悪い徴候だ」)、変わらなければいけないということに自身も気づいている。しかし、自分の力では変えることができない。『罪と罰』の創作ノートには、スヴィドリガイロフのせりふとしてこんな言葉が記されている。「恋愛は進展を必要とするが、わたしは退屈で耐えら

れない。恋愛によって自分をばか者にするのは、なんという物好きだろう⁴⁶」。＜暴君＞であるスヴィドリガイロフにとって、相手と平等の立場で愛するなどということとはありえない。一方、同じ創作ノートの中で、ラスコーリニコフに関しては、友情も愛も必要としないと豪語しながら、「マルメラードフの娘への愛情の進展は、彼をまごつかせる⁴⁷」とある。意に反して「ばか者」になってしまうから、ラスコーリニコフには救いがあるのだ。

スヴィドリガイロフは「退屈」を逃れるために、「進展」のない女色に走るが、それとても彼を空虚な世界から救い出してくれるものではない。「あの女なら、なんとかおれを碾きなおしてくれた〔いい方向にもっていった〕かもしれないがな⁴⁸」という言葉からもわかるように、ドゥーニャは、彼が変わる最後のチャンスを与えてくれる女性だった。しかし、「進展する」(＝変化してゆく、成長してゆく、わからないものに身を任せる)意思のない彼の、出来合いの愛の押し売りは、彼女に受け入れられはしない。

彼はドゥーニャを手籠めにしようと部屋に閉じ込めた時のことを思い出す。拳銃を発射してまで抵抗を示した彼女も、ついに無抵抗になったが、スヴィドリガイロフは彼女に襲い掛かることはできなかった。「彼はまた黙り込んで、歯をくいしばった。ふたたび〔拳銃をだらりと下げた時の〕ドゥーネチカの姿が彼の目の前に現れた。(…)彼はまさしくあの瞬間、彼女がかわいそうになり、心臓がしめつけられるような感じがしたことを思い出した⁴⁹」。心臓がしめつけられるように感じた＜私＞と向かい合うことは、彼には恐ろしいことである。だから、思い出すことを拒否する。彼は自分を「ばか者」にしてまで生きていることを潔しとしない。論理的に行き着く先は自殺である。心の中で死に抵抗するものはない。ラスコーリニコフのような「大衆」はあまりにも生きたがる、だからこの手合いは「卑劣漢」なのだ、というスヴィドリガイロフの言葉が思い起こされる。

スヴィドリガイロフからすれば、生きたいという思いは、非知性的で、愚かな自己保存本能であり、それに縛られることない自分を、彼は自由な人間だと自負していた。死後に残された手帳には、「健全な理性〔здоровый

рассудок]をもって死ぬのだから、自分が死んだことで誰も責めないように」と記されてあった⁵⁰。ラスコーリニコフは「健全な理性」で人を殺したが、スヴィドリガイロフは同じ「健全な理性」で自分を殺したのである。

『罪と罰』には、ラスコーリニコフやスヴィドリガイロフと同じように、自身の<知>を誇り、<知>に溺れる登場人物がもう一人いる。予審判事のポルフィーリイである（彼もラスコーリニコフ同様、みずからを「聡明な人間」と呼ぶ）。

ポルフィーリイの最大の関心事は、犯人を更正させることではない、罰することでもない。事件あるいは容疑者の性格を徹底して分析・研究し、動機は何かを考え、行動を<観察>する。仮説を立て、その仮説に則って戦略的に容疑者を追い詰めるが、その過程では容疑者だけでなく、時に自身の友人を騙すことすら厭わない。容疑者の心理をゆすぶって、相手が犯人であると特定するためにあらゆる手を使う。ポルフィーリイは、相手の裏をかいて勝利する戦術の話が大好きで、自ら軍人になればよかったと考えているくらいである。事件は彼にとってはまさに、情熱を傾けることのできる知的ゲームにほかならない。

一方、ラスコーリニコフやスヴィドリガイロフもまた、知的ゲームにのめりこむ。ラスコーリニコフは老婆を殺害後、さまざまな道を考え、「出口」を考えた。ラズミヒンの道、スヴィドリガイロフの道、ソーニャの道、自身の道を模索すべく、可能な道を検討し、そして「出口」を捜し求める。生きるか死ぬか、自首か逃亡か、どちらが有利か、出口を求め、そのつどの状況に応じてAかBかの選択をする。ラスコーリニコフを殺人犯と目して追い求めるポルフィーリイは罠を仕掛け、ラスコーリニコフの心を揺さぶろうとするが、ラスコーリニコフはその罠がどこに仕掛けてあるのか、見破ろうとし、同時に、相手を攪乱するための作戦を考える。スヴィドリガイロフも、ドーニャ獲得という自身のゴールをめざしてさまざまなかけ引きをする。ドーニャに自身のよい噂が伝わるように、博愛家を装って金をばらまく。ドーニャを<落とす>ために、盗み聞きしたラスコーリニコフのソーニャへの告白さえ、切り札として利用した。

勝つか負けるか、ゲームにおいてはこれが最大の関心事である。勝てば、相手より知的にすぐれていることの証しになる。「ぼくは奴らには負けないんだ」—これはラスコーリニコフの口癖だ。彼の「理論」では人間は、みんなが平等な権利を持ち、「永遠の戦い」を行うことになっている。驚くべきことに、まったく戦う意思のないソーニャに対しても、彼は戦っている。

「ぼくが今、悪いことをしたと告白したとしても、それがきみにとって何だろう？ ぼくに対するこのばかげた勝利が、きみにとって何だというのか？⁵¹」。これはまるで、砂漠で幻影と戦う宮沢賢治のソンバーユ将軍（『北守将軍と三人兄弟の医者』）だ。将軍と同様、いたるところに＜敵＞だらけだと思い込んでいるラスコーリニコフは、「あなどられまい」と胸をリンとはり、いつでも臨戦体勢にあった。

どんな手段を使っても勝てばいい。そう考えるスヴィドリガイロフは、狙いをつけた女性に対してはお世辞を並べ立てる。そして事が成就すれば、あなたもわたしとおなじく快樂を追及していたのですよと、本音を吐いてゲームセット。

ポルフィーリイにとっての勝利は、犯人を捕まえることではなく、自身が推論したことの裏づけをとることにある。だから、彼はラスコーリニコフを犯人と確信しながらも、自殺をした時のことを想定して、彼が犯人であるという証拠となるものを残しておいてくれと頼むのである。ポルフィーリイはソーニャと違い、心底、ラスコーリニコフのことを心配してくれる人間ではない。「あんたはどうなるの」というソーニャの「子どものような」問いかけは、彼からは出てこない。戦略的に温かい忠告はするが、結局は見捨てるのだ。こういうところが「終わってしまった人間」の真骨頂である。

この「終わってしまった人間」という言葉は、「いったいあなたは何者なのか。あなたは預言者でもあるわけですか。なんだってそんな堂々とした平穩の高みから、もったいぶった予言などできるんです？⁵²」というラスコーリニコフの問いかけに答えた言葉である。「なるほど、感じたり、同情したりすることはできるし、それにまあ、少々、ものも知ってはいるが、もうすっかり終わってしまった人間なんです⁵³」。ポルフィーリイのいう

「同情 *сочувствие*」はあくまで相手の感情が理解できるというだけのことであって、相手の苦しみを共有する「共苦 *сострадание*」ではないことに注意したい。また彼は、「神はあなたに生活を用意した」とラスコーリニコフに言う。ここでいう「生活」とは変わりうる可能性である。何か新たなことが起きる可能性である。年齢的には35、6歳で、けっして年老いてはいえないが、にもかかわらず、ポルフィーリイ自身は自分を「老人」と呼ぶ。彼のすべての言葉はラスコーリニコフを追い詰めるための戦略にちがいないが、おそらくこの先もう自分には新しいこと、自身の内的変化は起きないだろうと思っていることも事実なのだろう（真実味を増すためには、事実を混ぜることも必要なのだから）。職業としてはかかわり、助言も与えるが、他人の人生に本質的にコミットできない。自分が何者か、もうすべてくわかっている。そして十分満足している（その象徴となるのが彼の肥満と、異様に飛び出た腹である）。

ラスコーリニコフの場合は、若いこともあって、どんな未来が待っているかは未知であると、ポルフィーリイは考えた。が、ラスコーリニコフ自身は決してそうは思っていない。彼にとって、自身の未来は頭の中ですべて検証されている。たとえば、自首をすれば、いずれ改心することになるだろうことも、ちゃんと予想していた。自首するために警察署に出向く途中で、キリストとおぼしい幻影を見た時にも、別段「驚きはしなかった。彼はもう、当然そうなるはずだと予感していたのである⁵⁴」。

ラスコーリニコフは長い時間を経れば、自身でも悔悟のような内的変化が起こることを知っている。しかし、その変化の意義そのものを今の彼は信じられない。自首を勧める者は、ポルフィーリイであれドゥーニャであれ、あるいはソーニャであっても、流刑によって彼の魂を従順なものにしようとする「やつら」（＝敵）の一人、その本性からして「卑劣漢や強盗」あるいは「白痴」の一人にすぎない。彼は、今の何でも知っている若い、知的な自分が絶対的な権威であるという思い、その精神の牢獄から逃れられないのだ。

5.

ドストエフスキイの思い描く再生というのは、＜戦う＞ゲームの世界を抜け出すことから始まる。ゲームの世界を抜け出す方法は一つ、身に染み付いた知性至上主義を捨てることである。

ドストエフスキイにとって知性至上主義を捨てるということは、人間は所詮、卑劣漢だと割り切るのではなく、人間の善良さをどこまでも信じ、そして愛することである。もしも人間は善人で、卑劣ではないという結論が得られれば、人類の未来にも「障害」はない。

また、知性至上主義を捨て去るということは、自分を絶対化しないことである。ドラデダム織のショールによって象徴されるような、互いが一つになるような生のあり方を受け入れることである。今の自身の意識にしがみつかずに、内的変化を、生そのものを受け入れることである。

とはいえ、この内的変化を受け入れることに関しては、異論を挟む論者もいる。たとえば、すでに触れた E.H.カーは、流刑によって打ち碎かれたラスコーリニコフから、彼が力に満ち溢れていた時に足蹴にしていた解決を受け入れなければならないのかと、疑問を呈している⁵⁵。しかし、監獄においてラスコーリニコフが体験した内的変化は、カーの考えるような「肉体の衰弱と肉体の苦痛」によるものではなかった。なるほど、ドストエフスキイは物語の最後で、「新しい生活」は「これからまだ高い値を払ってあがなわねばならないものである」と記している⁵⁶。ただ、高い値で支払うものとは肉体の苦痛ではなく、精神の苦悩（あるいは「偉業 подвиг」）であり、しかも、その＜支払い＞はあくまで内的変化が起きたあとの話である。

ドストエフスキイはまず、何でも知っていると思い込んでいるラスコーリニコフに、知的な理解にはおさまりきれない、数多くの「説明のつかない実例」を突きつける。その結果、たとえば、生きることに絶望していると思っていた徒刑囚たちがみな、意外にも、生そのものを愛していることを、ラスコーリニコフは感じるようになった（「彼は仲間の徒刑囚たちを見て、驚いた。彼らはみな、なんと生を愛し、生を大事にしていたことか！⁵⁷」）。このような驚きの体験が無意識の中に積み重なって、＜突如とした

>変化が準備されていたのだ。—ラスコーリニコフはある日突然、自分がソーニャを愛するようになっていくことに気づく。その時には、これまでの何もかも知っているという傲慢な意識はすでに吹き飛んでしまっている。

「今の彼には何一つ、意識的に解決することはできなかつただろう。彼はただ感じただけだった。弁証法の代わりに生活が登場したのだ。意識のなかでも、まったく別の何かを作り上げなければならなかつた⁵⁸」

<知>に捕らわれたラスコーリニコフは、ソーニャを人類の苦悩を具現化したものと見做し、ソーニャたちを救うという大義名分のもと、じつは自身のことばかりを考えてきた。しかし、今や、彼は「自分がたえず彼女〔ソーニャ〕を苦しめ、彼女の心 сердце をさいなんでいたことを思い出す。おれは彼女を苦しめているというくらいの意識は、彼も早くからもっていた（「じっさい、きみにはこんなことは何もわからない。きみはただ……ぼくのために苦しみぬくだけなんだ！⁵⁹」）。重要なのは、彼女を苦しめていたのが、自身の傲慢な<知性 ум>であると気づいたことだ。この知性を関与させることなく、ひたすら「心」で痛みを「感じる」こと、そうすることによってのみ、ラスコーリニコフは変わることができた。それはもちろん、「知」と表現してもよいのかもしれないが、この「知」は単なる知識ではなく、「まったく別の何か」である。愛情をもって相手の心に透入する、という意味を新たに含みこんでいる「知」である。

それは未来に書かれることになる『白痴』では、「たいせつな知 главный ум」と呼ばれ、主人公ムイシュキンの性格の特徴を示すものとなるだろう。彼が、「聡明な者」とであると自認する者たちから「白痴」と揶揄されるのには意味があるのだ。

注

¹ Достоевский Ф.М. Полн. соб. соч. в 30 томах. Т.22. Л., 1981. Стр.25. 以下、本

全集は『ドストエフスキイ 30 巻全集』と略記する。

- 2 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 6 巻、25 頁。「障害物」は原文では *преграды* である。引用中の傍点は原文ではイタリックで、下線による強調は筆者のもの。以下、同じ。
- 3 同上、201 頁。この言葉は予審判事ポルフィーリイのもので、ラスコーリニコフ自身は、非凡人は、「ある種の障害を踏み越えることを良心に許す権利」を持つと言い、その実例として、「ニュートンは、その発見を全人類に知らせるためになら 10 人ないし 20 人を除去する」権利を持つと語っている（同上、199 頁）。「障害」は原文では *препятствия* である。
- 4 同上、25 頁。
- 5 同上、203 頁。
- 6 同上。
- 7 同上、400 頁。
- 8 E.H. カー、松村達雄訳『ドストエフスキイ』（筑摩書房、1968 年）、194 頁。
- 9 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 6 巻、21 頁。
- 10 同上、54 頁。
- 11 『自死という生き方』（双葉社、2008 年）を参照。氏によれば、「この科学主義と資本主義の時代において、宗教にも伝統文化にも頼らずに」、死を「晴朗で健全に受け入れること」を考えたという（同上、35 頁）。
- 12 同上、401 頁。
- 13 同上、46 頁。
- 14 同上、49 頁。
- 15 同上、50 頁。
- 16 同上。
- 17 同上、334 頁。
- 18 同上、243 頁。
- 19 この一体感は、ソーニャやカテリーナ、そしてその子どもたちが貧しさの中にあって、一つしかない「ドラデダム織のショール」を着まわしていることによって象徴的に示されている。
- 20 ロシアの＜生理学もの＞に関しては、以下の拙稿を参照されたい。「都市ルポルタージュの世界」（朝日新聞社「週間朝日百科 世界の文学」9、1999 年）。「＜生理学もの＞とゴーゴリ」（海上保安大学校「研究報告」（法文系）第 1 号、1994 年）。
- 21 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 6 巻、321 頁。
- 22 同上。
- 23 同上。
- 24 「健全な理性〔*здоровый рассудок*〕があるなら、彼女のような考え方は成り立つだろうか」とラスコーリニコフは自問する（同上、248 頁）。
- 25 同上、253 頁。
- 26 1877 年の『作家の日記』（12 月号）でドストエフスキイは書いている。「〔私は、〕自分のことを健全だと見なしている人々が、じつは病んでいることを長編小説や中編小説で暴露したことがある」と（同上、26 巻、107 頁）。彼によれば、多くの人々はまさに「健全さ」によって病んでいる。ここで言う「健全さ」とは、「自分の正常さへの度外れの自信」、言い換えれば、「時に自分の無謬性を確信するほどの恐ろしいうぬぼれ、破廉恥な自己陶醉」を意味する。おそらく彼が暴露したその小説の一つが、『罪と罰』であったことは疑いない。

ちなみに、ラスコーリニコフのめざす「健全な理性」の示す道とは、大審問官（『カラマゾフの兄弟』）へとつながる道である。

- 27 同上、第6巻、253頁。
- 28 あるいは、ラスコーリニコフは、リザヴェータが巻き添えになったのも「パーセンテージ」の問題として考えたのかもしれない。
- 29 ある評者は、このラスコーリニコフの突然の気分の変化を「科学」と関係づけて、次のように指摘している。『科学の』言葉は、それを言った人々も、その言葉の対象となった人々もともに、疎外と非人間化に追い込むことになる（Harriet Murav, *Holy foolishness : Dostoevsky's novels & the poetic of cultural critic*, Stanford University Press, Stanford, California, 1992. p.59.
- 30 『ドストエフスキイ 30巻全集』第6巻、86頁。
- 31 小泉猛訳（集英社ギャラリー『世界の文学』14に所収）では、「彼女」はそのまま「あの女」と訳されているが、他の訳ではみな、「彼女」をお婆さんと解釈した訳語をあてている。江川卓氏は自著『謎解き『罪と罰』』の中で、このような「彼女」を「老婆」ととった訳は誤訳かもしれないと指摘し、こう記している。「虚心に考えれば」、「『彼女』にいちばんふさわしいのは、その直前に話題にのぼった『K並木道の少女』のはず」だと（1986年、新潮社、163頁）。氏はこの解釈の上に立って、「少女」を救ったラスコーリニコフの行為は「人類のための苦行の生」の「最初のひな型」として考えられていたのではないかと推測しているが、そのような説明では、少女を救済しようとした行為とそれ以前の彼の善行との関わりがわからないし、なにより、ラスコーリニコフが少女を見捨てたことが、「きわめて重大な一点」とどのように関係するのか、なぜ今、彼が2ヵ月間考えなかったことに直面するのかが、見えなくなってしまう。
- 32 『ドストエフスキイ 30巻全集』第6巻、82頁。
- 33 同上、400頁。
- 34 同上、116頁。ここで言う「科学」とは、理性的に理解された個人の利害関係の原則に基盤が置かれている哲学、具体的には、ベンタム、ミル、スペンサーたちによって代表される功利主義的哲学を指す。詳細は『罪と罰』注釈を参照されたい（同上、第7巻340-341頁）。ただ、『罪と罰』全体から見れば、科学の定義とは、体系化し、法則性を見出す、実証的な知識ということになろう。ちなみに『作家の日記』に記されたドストエフスキイの科学に対する根本的な考え方を簡単に示せば、おおよそ次のようになる。一科学は頭脳で幸福を生み出そうとするが、そのようにして作られるのは物質的幸福でしかない。
- 35 たとえば、妻と家族の者に対するマルメラードフの「病的なまでの愛情」は、ラスコーリニコフの頭を混乱させ、「病的な感覚」を呼び起こす。
- 36 『ドストエフスキイ 30巻全集』第6巻、401頁
- 37 同上、第7巻、41頁。
- 38 同上、第6巻、401頁。
- 39 同上、399頁。
- 40 同上、146頁。
- 41 同上、383頁。
- 42 Лодзинский В.Э. «Тайна» Свидригайлова(Одна из «поворотных вех» в работе Достоевского под романом «Преступление и наказание» – В кн.: Достоевский. Материалы и исследования (10). Л. 1992. Стр.74.
- 43 『ドストエフスキイ 30巻全集』第6巻、358頁
- 44 同上、357頁。

45 同上、217 頁。

46 同上、第 7 巻、200 頁。

47 同上、90 頁。

48 同上、第 6 巻、390 頁。

49 同上、390 頁。

50 同上、409 頁。スヴィドリガイロフは＜健全に＞死んだ。一方、ラスコーリニコフ
はといえば、「健全な理性」をもって老婆を殺しはしたが、＜不健全＞にも、「卑劣漢」
として生き延びてしまうのである。

「健全な理性」という言葉はラスコーリニコフもスヴィドリガイロフも使うが、こ
の言葉をもっとも＜健全に＞使うのは、マルメラードフである。カテリーナは売春
をいやがるソーニャに、「何を大事にしてるんだい。たいしたお宝でもないのに！」
とせせら笑ったが、その言葉は「健全な理性」をもって言われたものではないと、
マルメラードフは懸命に庇っている（同上、17 頁を参照）。

51 同上、318 頁。

52 同上、352 頁。

53 同上。

54 同上、406 頁。『罪と罰』の創作ノートには、長編の結末として、ラスコーリニコフ
が「キリストの幻」を見るというヴァリエーションが記されている。

55 前掲、『ドストエフスキイ』、194 頁。

56 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 6 巻、422 頁。

57 同上、418 頁。

58 同上、421 頁。

59 同上、318 頁。